

— 原 著 —

保育者の意欲向上や苦手意識の克服に影響を及ぼす要因について

川 村 高 弘

Regarding Factors Influencing Childcare Workers' Motivation and Overcoming their Weaknesses

Takahiro KAWAMURA

要 旨

近年、地域や家庭の教育力の低下や教育・保育に対するニーズの多様化に伴い、保育者に対する期待は今まで以上に高まっている。しかし、保育者の早期離職の問題は依然として深刻化している。早期離職の主な原因としては、「職場内の人間関係」が考えられる。

そこで本研究では、保育者について、職場内の人間関係に視点を置きつつ意欲向上につながった要因とともに保育現場において苦手なことは何か、また、それをなぜ克服できたのかについて明らかにすることを目的とし、調査を行った。

その結果、園内において保育にかかわるすべての保育者が、お互いを認め合いながら、支え合い、高め合っていくことが、意欲向上や苦手意識の克服に繋がることが示唆された。また、多くの保育者が子ども理解や保護者対応に難しさを感じているが、子どもや保護者との積極的なふれあいによって苦手意識を克服していることが示された。

キーワード：保育者、意欲向上、苦手意識、克服

I. 問題と目的

近年、地域や家庭の教育力の低下や教育・保育に対するニーズの多様化に伴い、保育者に対する期待は今まで以上に高まっている。幼稚園教諭について資質の向上の方策をまとめた報告として、平成14年6月に文部科学省より出された『幼稚園教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園教員のために—』では、教員集団の一員としての協働性と幼稚園教諭自らが資質向上に取り組むことが重要であると説いている。また、保育所保育指針(2008)では、保育者の資質向上に関して、「職員同士の信頼関係とともに、職員と子ども及び職員と保護者との信頼関係を形成していく中で、常に自己研鑽に努め、喜びや意欲を持って保育に当たること」と明記されている。しかし、保育者の平均勤続年数が幼稚園教諭で7.8年、保育士で7.6年と、小学校教諭の19.0年など他業種に比べて非常に短く、保育者の早期離職の問題は深刻化しており、保育者同士が信頼関係を築き意欲を持って資質向上に努めることができにくくなっているのが現状

である。

保育士養成施設の卒業生を対象に実施した調査によれば、現在保育者として働いている人の82.1%が仕事を辞めたいと思ったことが「ある」と回答している。そして、それがどのような時かという質問では、「職場内の人間関係がイヤだと思ったとき」(55.2%)が最上位を占めている(保育士養成資料集第50号, 2009)。これでは、実際に離職に至らなかったとしても保育者相互が信頼関係の中で資質向上に取り組み、経験を積み重ね、より良いキャリアを形成していける状況にあるとは言いがたい。

しかし、保育者の成長にとって、上司や同僚に支えられることとともに、困難を乗り越えようとする強い意志と意欲的に自己課題の克服に努めることが重要である(川村, 2012)。

そこで本研究では、保育者について、職場内の人間関係に視点を置きつつ意欲向上に繋がった要因とともに保育現場において苦手なことは何か、また、それをなぜ克服できたのかについて明らかにすることを目的とする。

II. 研究の方法

1. 調査対象と調査時期

2014年8月中旬～8月下旬にかけて、関西圏にある42園の公立幼稚園に質問紙を郵送した。常勤及び非常勤の幼稚園教諭に無記名自記式で回答してもらい、園毎に郵送によって回収した。配布は全231票で、38園198名の幼稚園教諭から回答を得た(回収率85.7%)。そのうち回答に不備のなかった170名のデータを分析に用いた。

2. 調査内容

本調査で回答を求めた自由記述の質問項目は次の通りであった。

- (ア) これまでに、上司や同僚からの対応で、どんなことが保育をする上でやる気になりましたか。
- (イ) 保育にかかわることについて、以前は苦手だったことが、克服できたことがあれば教えてくださいいただけますか。
- (ウ) (イ)に関連して、なぜ克服できたのかについても教えてくださいいただけますか。

III. 結果と考察

1. 調査回答者の属性

本調査の回答者の属性は、表3-1のようになった。

今回の調査の属性を文部科学省による2015年度学校基本調査報告書及び2013年度学校教員統計調査(以下、文科省調査)に示されている全幼稚園(国立、公立、私立を含む)と比較した場合、男性の割合は2.9%(本調査)と6.6%(文科省調査)であった。また、経験年数を比較した場合、5年未満は、21.2%(本調査)と44.6%(文科省調査)、5年以上10年未満が22.9%(本調査)と21.5%(文科省調査)、10年以上20年未満が25.9%(本調査)と16.6%(文科省調査)、20年以上が30.0%(本調査)と17.2%(文科省調査)となっていた。これらのことから

本調査の方が男性の割合が低く、経験年数の多い幼稚園教諭の割合が高い傾向にあることがうかがえる。

表 3-1 回答者属性

調査項目	内 容	度 数	パーセント
性 別	女性	165	97.1
	男性	5	2.9
	合計	170	100.0
経験年数	1年未満	12	7.1
	1年以上5年未満	24	14.1
	5年以上10年未満	39	22.9
	10年以上20年未満	44	25.9
	20年以上	51	30.0
	合計	170	100.0

2. 自由記述の結果

自由記述への回答結果は、次の通りとなる。なお、以下の引用部分の後に示した4桁の数字は、調査票のコードである。

(1) 保育者の意欲向上につながった要因について

保育者の上司や同僚からの対応で、意欲向上に繋がった要因についての回答は、その内容から、①受容、②アドバイス、③支援、④ほめられる、⑤同僚の姿の5つのカテゴリーに分けられた。表3-2は、カテゴリーに分類した結果である。表の下にカテゴリーごとの主な回答を示した。

表 3-2 保育者の意欲向上につながった要因の種類

n = 168

区 分	度数	%
受容	89	53.0
アドバイス	35	20.8
支援	22	13.1
ほめられる	15	8.9
同僚の姿	7	4.2
合 計	168	100.0

①受容：「自分のしていることを認めてもらったとき」(1001) など。

②アドバイス：「自分が日々の保育で困っている時に、具体的なアドバイスがいただけたとき」(1016) など。

③支援：「困っている時に声をかけてくれ仕事を手伝ってくれた時」(1045) など。

- ④ほめられる：「自分のよいところをほめられたこと」（1003）など。
- ⑤同僚の姿：「日々の保育に真摯に向き合う先生方の姿を見て、私も必死でやろうという思いになります」（1141）など。

今調査における「保育者の意欲向上につながった要因」全体で53.0%と最も多かったのが「受容」であり、続いて「アドバイス」が20.8%となった。これらのことから、多くの保育者が、上司や同僚から認められたり、また、アドバイスを得られたりすることによって意欲を高めていることがうかがえる。

（2）保育者の克服できた苦手な事柄について

保育者の克服できた苦手な事柄についての回答は、その内容から、①子ども対応、②人前での活動、③音楽表現、④保護者対応、⑤動植物、⑥造形表現、⑦身体表現、⑧その他の8つのカテゴリーに分けられた。表3-3は、カテゴリーに分類した結果である。表の下にカテゴリーごとの主な回答を示した。

表3-3 保育者の克服できた苦手な事柄の種類

n = 118

区 分	度数	%
子ども対応	22	18.6
人前での活動	20	16.9
音楽表現	16	13.6
保護者対応	13	11.0
動植物	13	11.0
造形表現	9	7.6
身体表現	9	7.6
その他	16	13.6
合 計	118	100.0

- ①子ども対応：「子どもの良いところを見付け認められたり、課題として捉えることの許容範囲が広がった」（1050）など。
- ②人前での活動：「集会などたくさんの人前で話すのが苦手でしたが、何とかできるようになってきました」（1013）など。
- ③音楽表現：「ピアノ」（1070）など。
- ④保護者対応：「保護者とのかわりで、この仕事はじめた頃は、苦手意識がありました」（1037）など。
- ⑤動植物：「虫をさわられるようになった」（1017）など。
- ⑥造形表現：「絵画表現の指導が苦手だったが、子どもと楽しめるようになってきた」（1005）など。

- ⑦身体表現：「身体表現などさまざまな表現活動」（1078）など。
- ⑧その他：「パソコン」（1008）、「文章を書くこと」（1031）など。

今調査における「保育者の克服できた苦手な事柄の種類」の上位は、「子ども対応」が18.6%、「人前での活動」が16.9%「音楽表現」が13.6%となった。これらのことから、子どもへの対応や人前での活動、ピアノなどの音楽表現を苦手としている保育者であってもその事柄を克服に繋げていくことができるということが示唆された。しかし、「子ども対応」、「人前での活動」、「音楽表現」が「保護者対応」（11.0%）や「動植物」（11.0%）などと比較して突出して高い数値とは言いがたい。これらのことから、多くの保育者が多くの苦手な事柄を克服できていないということがうかがえる。

（3）保育者の克服できた苦手な事柄について

保育者の克服できた苦手な事柄についての回答は、その内容から、①個人的対処、②経験、③アドバイス、④職業意識、⑤子どもとのふれあい、⑥保護者とのふれあい、⑦参考の7つのカテゴリーに分けられた。表3-4は、カテゴリーに分類した結果である。表の下にカテゴリーごとの主な回答を示した。

表3-4 保育者の苦手な事柄の克服できた要因

n = 111

	度数	%
個人的対処	29	26.1
経験	22	19.8
アドバイス	17	15.3
職業意識	14	12.6
子どもとのふれあい	11	9.9
保護者とのふれあい	10	9.0
参考	8	7.2
合計	111	100.0

- ①個人的対処：「必死に練習したから」（1070）など。
- ②経験：「経験と年齢（保護者より年上になった）によって」（1016）など。
- ③アドバイス：「先輩の先生に教えて頂き、また実際にそうした時の子どもの表情や反応によって私自身の喜びも大きかったからです」（1107）など。
- ④職業意識：「職業意識」（1096）など。
- ⑤子どもとのふれあい：「子どもと一緒に言葉を互いに交わす間に自然と物事のとらえ方や感じ方に変化がみられた」（1014）など。
- ⑥保護者とのふれあい：「保護者の方に、積極的に自分から話しかける機会をもつようにしました」（1037）など。

⑦参考：「先輩の先生の保育を見学したりして学んでいった」（1102）など。

今調査における「保育者の苦手な事柄の克服できた要因」の上位は、「個人的対処」が26.1%、「経験」が19.8%、「アドバイス」が15.3%となった。これらのことから、保育者が苦手な事柄を必死で努力したり、経験を積んだり、先輩保育者からアドバイスを得て苦手な事柄を克服している姿がうかがえる。また、子どもや保護者への対応を苦手と感じているからこそ、そのことから逃げずに、子どもや保護者との積極的なふれあいによって苦手意識を克服していることも推察される。

IV. まとめと今後の課題

本調査の結果より、園内において保育にかかわるすべての保育者が、お互いを認め合いながら、支え合い、高め合っていくことが、意欲向上や苦手意識の克服に繋がることが考えられる。また、多くの保育者が子ども理解や保護者対応に難しさを感じているが、子どもや保護者との積極的なふれあいによって苦手意識を克服していることが示された。さらに、「音楽表現」、「造形表現」、「動植物」などに対する苦手意識は、保育者になる前の段階である学生の頃から抱えていることが考えられるが、意欲的に努力や経験を積み重ねることが克服に結びつくことが示された。

津守（1997）は、保育者同士のより良い関係構築が保育の質の向上に繋がるとして、「保育の実際は、保育者同士の信頼的協力関係によって成り立つ。それぞれが、自分と対等の人間として相手と向き合う関係である。お互いに協力できるのは、一方には、自分が他者の状況に置かれたならば同じようになしうる交換可能性をもつからであり、他方には、異なった個性をもつ他者が開くであろう未知の可能性を信頼するからである。それらが織り成されて力動的な保育の場となる」と述べている。また、幼児教育・保育・地域の子育て支援を総合的に推進する新しい制度として、平成27年4月よりスタートした、「子ども・子育て支援新制度」においても保育の質を高めることの大切さをうたっている。

保育者のキャリア形成は学生の段階から始まっていると捉え、保育者養成における授業やカリキュラムにおいて、どのような配慮・改善をすれば、卒業後、保育現場の中で、保育者相互に育ち合い、認め合い、意欲を高め合いながら、苦手分野の克服にも励みつつ資質向上に繋げていけるのかについて検討していくことが今後の課題である。

引用文献

- 川村高弘（2012）. 幼稚園教諭における自己教育力とレジリエンスおよび保育者効力感との関連. 修士論文（愛媛大学大学院）.
- 厚生労働省（2014）. 平成26年賃金構造基本統計調査.
- 津守真（1997）. 保育者の地平. ミネルヴァ書房.
- 保育士養成協議会（2009）. 保育士養成資料集第50号.
- 文部科学省（2013）. 学校教員統計調査報告書.
- 文部科学省（2015）. 学校基本調査報告書.

参考文献

- 川村高弘・永井久美子（2015）. 保育専攻大学生における動物と触れ合う経験が保育実践に与える影響. 神戸女子短期大学『論功』, 第60巻, pp.1-8.
- 厚生労働省（2008）. 保育所保育指針.
- 西坂小百合（2002）. 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス, ハーディネス, 保育者効力感の影響. 教育心理学研究, 50, pp.283-290.
- 無藤隆・北野幸子・矢藤誠慈郎（2015）. 「増補改訂新版 認定こども園の時代」. ひかりのくに.
- 森敏昭・石田潤・清水益治・富永美穂子（2001）. 大学生の自己教育力に影響する要因はなにか. 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第1部, 50, pp.1-8.
- 森敏昭・清水益治・石田潤・富永美穂子・Chock C. Hiew（2002）. 大学生の自己教育力とレジリエンスの関係. 広島大学教育学部附属教育実践センター（編）. 広島大学教育学部学校教育実践学研究, 8, pp.179-187.
- 文部科学省（2002）. 「幼稚園教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園教員のために—」報告書.
- 文部科学省（2008）. 幼稚園教育要領解説. フレーベル館.

付記

1. 本研究は、日本子ども社会学会第22回大会で口頭発表したデータを再分析し、論文としてまとめたものである。
2. 本研究を行うにあたり、ご協力いただいた幼稚園教諭の皆様にご心より感謝申し上げます。